雲一つない青空の下で

沖縄県立開邦中学校三年　島袋　莉安

雲一つない青空。湿気を含んだ南風が私の頬を撫でる。ああ、今年も夏が来た。私は、平和祈念公園を訪れて、平和への思いを馳せた。今年で沖縄戦終結から79年。この地であった出来事を考える。

「平和」

平和という言葉を耳にする時、真っ先にこの言葉の真の意味を考える。平和。それは、安心して暮らせることだろうか？それとも、家族と共に過ごせること？また、やりたい勉強ができること？友達と遊べることなのだろうか？広辞苑には、

「戦争や紛争がなく、世の中が穏やかな状態にあること。」

とある。今、私達ができている全てのことは、この「平和」の上に成り立っているものだと思う。この平和が失われた時、私達は今、あたり前にできていることを失ってしまうだろう。あたり前だと思っていたことは、あたり前ではなかったとそのとき気付くのだろう。しかし、そうはなりたくない。手遅れになる前に気付くにはどうすればよいか。そのために私は平和について真剣に「学ぶ」ことが今こそ必要だと思う。

「あなた達は、戦争体験者から直接お話を聞ける最後の世代です。学んだことを、あなた達が次の世代へと伝えて下さい。」

平和学習があると先生方が必ず言う言葉だ。私達は戦争体験者の方から直接学ぶことができる最後の世代だからだ。私達が次の世代へ伝えていかねば次の世代は学ぶことができなくなってしまう。だから今の私達が戦争と平和について学ぶことは、これからの未来にとってもとても大切で必要なことなのだと思う。

昨年、私は豊見城市の青少年国際交流事業でハワイに行き、その際に、パールハーバーを訪れた。これまでパールハーバーのことを日本側の立場として学んできた私にとって、アメリカ側の立場に立って、実際の展示物や資料などを見ることで、ハワイでの真珠湾攻撃の恐ろしさをより感じ、どちらの立場に立っても忘れてはならない出来事であることをその場で強く実感した。これは、私が小学校、中学校の平和学習でひめゆりの塔やガマで感じた気持ちと同じであった。

私達は、幼い頃から沖縄戦のことを平和学習などで学ぶため、これからも決して忘れてはならない出来事であると強く感じている。しかし、今まで相手国の立場になって戦争について考える機会はあまりなかった。相手の国にも日本、沖縄と同じように風化させてはならない出来事がもちろんあるのだ。それに気付くには相手の立場に立って歴史を見る必要があると感じた。互いの国が、自国の立場だけではなく相手国の立場に立って歴史をふり返ることで、互いに戦争、そして平和への理解が深まり、平和への思いが強くなるのではないだろうか。また、相手の立場に立って物事を見て考えることができるようになってこそ、これからすべきことに気付くのではないだろうか。そうすることで、世界はさらに平和へ向かい、新たな争いがなくなってゆくよう努力をしていく人が増えるのではないだろうか。

ハワイへ行った際に、私はパンチボウルも訪れた。パンチボウルは、第一次・第二次世界大戦やベトナム戦争で戦没した4万人以上の兵士が眠る国立戦没者墓地だ。平和の礎をつくることに関わった私の祖父によると、平和の礎はパンチボウルを参考につくられたそうだ。平和の礎にはパンチボウルとは異なった点がある。平和の礎は、軍人、民間人、国籍の区別なく、沖縄戦などで亡くなられた全ての人々の氏名が刻まれている。私は、平和の礎は、相手の立場に立ったからこそ、敵、味方関係なく平等に氏名が刻まれ、全ての人に平和を願っている記念碑になったのだと思う。

戦争について学ぶことは、時に怖くなってしまうことがある。目を逸らしてしまいたくなるような恐ろしい出来事もある。だが、それを学ばないと過去の出来事を知らないままに成長してしまうだろう。知らないまま無知でいることはさらに恐ろしいことを引き起こすことになると私は思う。過去の戦争という出来事についてまずは自ら学びたい。学ぶことで、

「戦争は二度と起こしてはならないことだ。」

と皆が思える未来を作りたい。そして、様々な見方で学ぶことで決して過去として風化させてはならない出来事を自分が知り、広げ伝えていくことができるだろう。

今、戦争体験者から話を直接聞ける私達は、自ら進んで聞き尋ね、学んでいくことが義務なのではないだろうか。そして学んだことを、後世の人達にも伝えていくことがもう一つの課せられた義務ではないだろうか。私達がこの義務を果たすことで、さらに平和な世界へとつながり、今あるあたり前があたり前のまま次の世代へつながっていくことを望む。

平和の礎から、世界に向けて平和の波が広がることを願い、私は平和への想いを過去から未来へと馳せて、雲一つない青空を見上げた。